

# 日刊建設工業新聞

クリーン環境時代をリードする



## 三建設備工業株式会社

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-35-8 TEL03(3667)3431  
http://skk.jp

九段下ビルの内部。暗がりの階段を上がると砂地の部屋が



### 九段下テラス「砂の器化計画」

関東大震災の復興で建設された東京・神田神保町の「九段下ビル」。完成から80年余を経たこの老朽ビルの一部を、イベントスペースとして利用する試みが進められてきた。窓枠の袖のコンクリート壁が崩れていたり、天井に開いた穴から水が滴っていたりと「廃虚」の趣すら漂わせるこのビルの情景に引き付けられた人たちが、写真や絵画、ファッションなどの表現の場に使ってきた。昨年夏から始まった一連のイベントは、この年末に終わりを迎える。最後の企画テーマは「砂の器化計画」。部屋一面に砂が敷き詰められた廃虚の一室が舞台となる。

### 年末まで写真展やライブイベント

主催は、建築関係のデザイン事務所「領域探査デザイン」の新藤典子さん。「九段下ビルはとても魅力的。使わないのはもったいない」(新藤さん)と一部を借り受けて「九段下テラス」と命名し、



オープニングを飾った奄美島唄ライブ

賛同する若手の写真家やデザイナーらとともにイベントを展開してきた。九段下ビルは文化財のような存在ではないが、だからこそ、現存していることが貴重ともいえる。参加したアーティストも共演している。

「太古1000年のシマ唄、廃虚を鎮める」というキャッチコピーの下で、家族を愛する気持ちや、奄美の人たちが苦渋の暮らしを強いられた過去などを万葉言葉でつづった歌声が届けられた。この日は、観客がはだしで砂地に座り込むというスタイル。朝崎さんは公演後、「砂がとても良かった。奄美のよう」と話した。

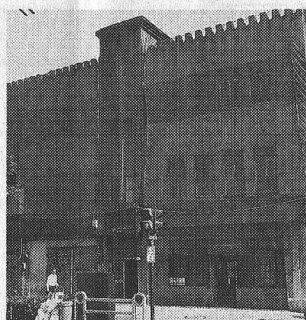
今後は、大津茂巳さんと笹山明日香さんによる鳥取砂丘の写真展(12月13・23日)などが予定されている。大みそかは、これまで撮影された九段下ビルの写真・映像を使つてVJ(ビデオジョッキー)イベントで締めくくられる。

取り壊しまでのすき間の時間を使い、廃虚を「大人の遊び場」にした新藤さん。調整や準備で困難もあったが、「イベントを始めて、かわる人が広がっていき、やる機会がなかったことを試せた。発信していくことが楽しい」(新藤さん)と振り返る。

イベント情報などはホームページ(http://www.yookitansu.co.jp)へ。

## 都心の廃虚をオトナが遊ぶ

現在の九段下ビル外観



九段下ビルの誕生は1927(昭和2)年の夏。震災の出火で焼失した商家の敷地を一体化して建設された。設計者の南省吾氏は、土木学会の「土木建築工事画報」(1928年11月号)で、今川小路共同建築(現・九段下ビル)を例に、概念自体が目新しかった共同化事業を説明している。当時の写真では、建物上端が冠のような凹凸で飾られたデザインや、「女子タイピスト学院」と書かれた看板が目を引き、モダンな雰囲気伝わってくる。

こちらは、この「場」を生かした展示を行ってきた。新藤さんが今回のコンセプトに選んだのは、RC造建物の主要材料の一つでもある「砂」。長年の汚れが砂地のように積もっていたことや、風化が進んだ躯体を指でなでると砂が静かにこぼれ落ちてくる様子が、会場の砂漠化というアイデアにつながったという。砂の器化計画では、11・12月の週末を中心にイベントが企画されている。今月1日には、「そとと廃虚に戻していく儀式の幕開け」(新藤さん)として、奄美島唄の

